「絵本の読み合い遊び」特別支援学校での実践と個性化する子どもの育ち

企画者・司会者　石川由美子（宇都宮大学教育学部）
話題提供者　仲野みこ（筑波大学附属大塚特別支援学校）
水谷勉（（株）ビー・アール・システムズ）
齋藤有（聖徳大学児童学部）
指定討論者　田島信元（白百合女子大学人間総合学部）

KEY WORDS:絵本の読み合い遊び　設定遊び　ｆNIRS

【企画趣旨】

日常の生活文脈と絵本の内容には深い結びつきがある。子どもは絵本を読み合うことで日常と絵本の内容を自然に対応させることが可能となる。

絵本の読み合い遊びは，そのような絵本の文化・歴史的な特性を利用して遊びに，絵本の文脈という緩やかな制約を加えている。

「絵本・遊び・絵本」という枠組みからなる絵本の読み合い遊びは，まず第１に，子どもの日常生活に埋め込まれていることを念頭に置く必要がある。日常から遊び、そして日常に戻る，ということが日々，繰り返される。第２に，枠組みが持つ緩やかな制約により，絵本の文脈に子どもが入り込み，次にその文脈を意識的にも無意識的にも手掛かりとして，遊びに熱中する。最後に，再び，自分が熱中した遊びを絵本の中に客観的にみる，という繰り返しとなる。

このことにより，遊びながら子どもは，日常と絵本，絵本と遊び，遊びと日常を，読み合い遊びを介して繰り返し繰り返し何度でも，主体的に対応づけることが可能となる。

絵本は子どもの言語発達に深く影響することは知られている。しかし，このように絵本で遊ぶ子どもたちの育ちは，それのみに集約できるものではない。本シンポジウムでは，筑波大学大塚特別支援学校でカリキュラム化された絵本遊びから，子どもの育ちを実践と実証の両面から検討したい。

【話題提供者の趣旨】

1. 仲野　みこ　ごっこあそびは、子どもにとって、「発達の舞台」である。しかし、発達に遅れのある幼児は、ごっこあそびのような「発達の舞台」に上がることが困難となる。なぜなら，発達に遅れのある子どもは，イメージの共有と、ふりあそびやなりきりあそび、見立てあそびなどの象徴機能の発達に困難を示すためである。発達の舞台で遊ぶため，現前にない“何か”をイメージする何らかの手がかりが必要となろう。

お互いの役割に対するイメージや役割が持つ典型的な動きの共有およびその調整、ルールの理解、そのような制約を自ら楽しむ動機づけ、次はどうなるのかといった予測可能な枠組みや構造など、あそびを共有するためのさまざまな知識や体験、物的環境や対人的環境などへの合理的配慮が必要となる。

絵本には、イメージを想起させる視覚的な手がかり、子どもが思わずなってみたいと思えるような魅力的な登場人物が含まれている。そして絵本を介した遊びには、注意や意味を共有しやすい構造や枠組み、次に何が起きるかに関する予測の持ちやすさや共有しやすさがある。特にオノマトペを用いた絵本では、リズミカルで口ずさみやすいオノマトペに動きのタイミングや行為の意味が内包されており、発達に遅れのある幼児も友達とイメージを共有しやすく、一緒に活動に参加しやすい。

そこで、本研究は、三年間の「絵本の読み合いあそび」を行った。絵本遊びを通したダウン症Ａ女児の３歳～５歳における言語および社会性の発達について報告したい。

2. 水谷　勉・齋藤　有　絵本遊びの中では、しばしばオノマトペを用いた絵本が用いられる。

本研究では，fNIRS（functional Near-infrared spectroscopy）を用いて、「ぴょーん」と「うぎゃー」（「うわーっ」の絵本を改変）の２つの絵本を聞いているときの脳の活動を調べた。いずれの絵本も２場面の繰り返し構造になっている。「ぴょーん」の絵本ではおもむろに飛び上がるが、「うぎゃーっ」では驚きの情動の理由となる恐怖の対象も描かれており、２つの絵本の間では情動の有無が異なっていた。これらの絵本を経験豊富な絵本の読み手がジェスチャーをつけて読んだところ、健常成人の聞き手では「ぴょーん」の絵本のときに右外側領域などの脳血流が有意に増大していたが、「うぎゃー」のときには前頭極の血流が有意に減少しており、類似した２つの絵本で脳活動の様相は異なっていた。とりわけ、前頭前野の脳血流減少は表情認知に関する先行知見でも報告されている。これらのことから、情動の認知のときには、前頭前野の活動は抑制されると推察された。特別支援学校の幼稚部に通うダウン症児の事例（以下、本児）にも同じ２冊の絵本を読んだところ、「うぎゃーっ」の絵本で本児の前頭極の脳血流が顕著に減少した。本事例が通う特別支援学校では、絵本の読み合い遊びを頻繁に行っており、本児にとっては絵本を通した情動理解が促されやすい環境であったと考えられる。

また、健常児を対象とした研究も進めているが、これらの結果においても S-M 社会能力検査の結果と前頭前野活動に相関が認められている。本シンポジウムでは、これら絵本と社会性の関連について脳活動の様相から検討を行う。

【指定討論者の趣旨】

指定討論の田島信元氏には，絵本の読み合い遊びが障害のある子どもの育ちを促す可能性と発展可能性について，また，絵本の読み合い遊びにおける実践研究と実証研究を結ぶ意味について氏のもつ豊富な経験と見識から深く掘り下げた指摘を頂き，シンポでの討議の糧としたい。

（文献）石川由美子・水谷勉・齋藤有・佐藤鮎美・河野武志・小林久男（2017）．脳血流からみた絵本の読みの熟達化．国際幼児教育研究（24），89－100.

(ISHIKAWA Yumiko, NAKANO Miko,
MIZUTANI Tsutomu, SAITO Yu, Tajima Nobumoto)